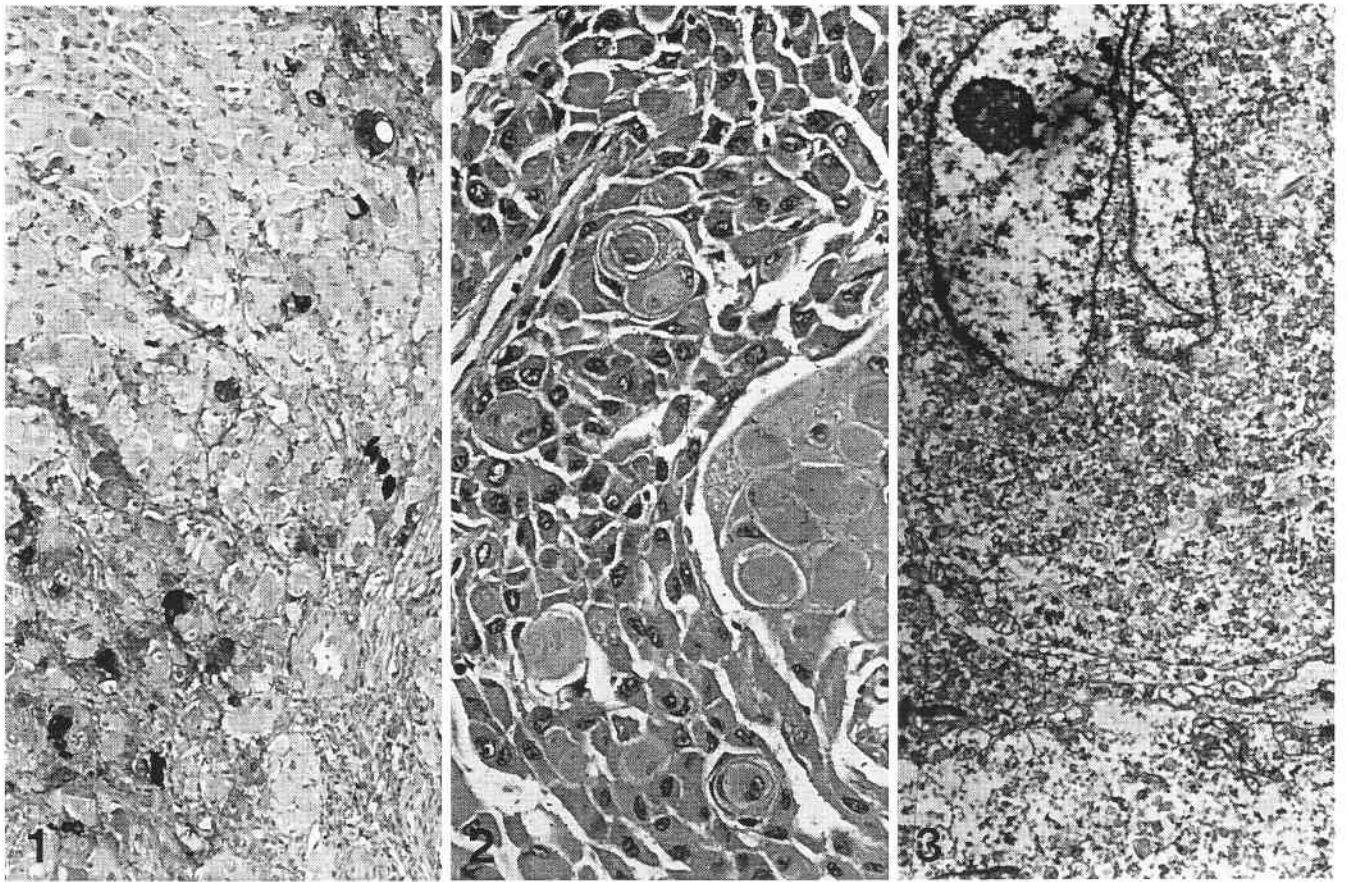


## イヌの眼窩内腫瘍

鹿児島大学農学部家畜病理学教室出題 第40回獣医病理学研修会標本 No. 783



動物：犬，マルチーズ，雄，9歳，体重 30.5kg。  
 臨床事項：1997年2月頃から左眼周囲が腫脹し，某動物病院で抗生物質治療を受けたが改善せず。やがて失明。1998年8月，鹿児島大学家畜病院来院時には左眼球は周囲組織が腫大し顕著に突出。6日後腫瘍は全剔出され，病理学教室に検査を依頼された。  
 肉眼所見：眼球萎縮著明で，角膜周囲から後背部にかけて取り囲む腫瘍は直径約6cm，断面は乳白色充実性で僅かな小出血巣を含んでいた。  
 組織所見：腫瘍細胞は充実性に増殖する大小の円形細胞の集群からなり，少量の結合織で小葉状に区画されていた。細胞境界はやや不鮮明。大型細胞は好酸性の豊富な細胞質と辺縁に寄った類円形の単核に明瞭な核小体を一～二個持つものが多く，小型細胞は細胞も核もさまざまな形態をとるが，玉葱状に別の細胞を抱き込む配列がよくみられた(写真1)。二核細胞もしばしば認められ，腫瘍辺縁部に多核巨細胞が多い箇所があった。部位により，大きな脂肪空胞や筋線維が混在し，結膜の附近や腫瘍内部にはリンパ球や形質細胞の浸潤巣が散見された。少数なが

ら小軟化巣や，脈管内への浸潤像がみられ，硝子体腔への腫瘍細胞の脱落が散見された。  
 腫瘍細胞の細胞質にはジアスターゼ消化耐性のPAS陽性顆粒が多数認められ，alcian blueでは均一な弱陽性を呈した。免疫組織化学ではvimentin, s-100, GFAP(写真2), cytokeratin陽性, CEA, EMA陰性を示した。  
 戻し電顕での観察では，切れ込みの深い不整形の核と細胞小器官の豊富な細胞質を持つ細胞が多かった(写真3)。細胞質内に，グリアフィラメントより大きい，短い直線状線維構造を認める細胞があった。細胞間突起が嵌合状の形態を示す箇所があったが，明瞭な接着装置は確認できなかった。  
 診断と考察：この腫瘍は形態学的には髄膜腫に類似する構造もあったが，免疫組織化学的ならびに電顕的に否定された。GFAP陽性を示すことからグリア系腫瘍であると思われる，その中では壊死巣や有糸分裂像が少なく，巨細胞の出現も限局性であったので退形成性星状膠細胞腫 anaplastic astrocytomaと診断した。